〈座談会〉

米軍占領下の甲府市を語る

―昭和20年～同26年―

はじめに

戦後四一年を経た今日、現代史をつづるうえで盲点となっているのは占領下だった昭和二〇年九月の終戦直後から同二六年九月の対日講和条約締結までの七年間の行政、戦後処理の実態である。

この歳月の軍政が地方自治体にどのような影響を与え、戦後の復興にどのような役割を果たして主権在民のデモクラシーが定着していったか―。甲府市史編さん委員会近・現代専門部会（伊東壮部会長）は、地方自治体の編さんでは初めて国会図書館にある山梨軍政部関係の報告資料四万五千点（マイクロフィルム）のうち約五千点の甲府市関係レポートを抽出して翻訳に着手した。

同じく、終戦直後、米軍政部および防諜部に関係した県職員、旧制中学当時の英語教師（通訳）、報道関係者など六氏をお招きして〝米軍占領下の甲府市〟をテーマに、約二時間にわたって貴重な体験を語ってもらった。今回は、市史編さん資料となる座談会の内容を要約して紹介することにした。

〈お招きした人〉（敬称略・順不同）

曾根　康夫　元総司令部防諜部顧問
保坂　忠信　元山梨軍政部民間情報教育課進言者（顧問）
榎本　愛子　元山梨軍政部通訳
福島　舜　元山梨県渉外課長
小林　静　元山梨日日新聞社編集局長
奈良　進　元山梨県知事室付通訳

〈聴く側〉（甲府市史編さん委員会近・現代専門部会員・他）

伊東　壮　山梨大学教授
坂本　徳一　山梨郷土研究会監事
有泉　貞夫　東京商船大学教授
島袋　善弘　山梨県立女子短期大学助教授
齋藤　康彦　山梨大学助教授
荻原　克己　山梨県地場産業センター
佐藤　正幸　ゲスト・山梨大学助教授
高木　伸也　甲府市史編さん担当管理主査

ときと場所
昭和六〇年一一月二六日
甲府・笹やレストラン四階和室

伊東　冷たい雨の中を遠くからお越しいただきまして大変感激しております。お集まりの皆さんは、山梨軍政部、民間情報部などの通訳、行政の面で米軍と直接、交流が深かった方々ばかりです。甲府市史編さんにあたり〝占領下の甲府〟の状況はどうだったのかを話題の中心において、皆様の貴重な体験を通してこれからお話しを伺いたいと思います。まず皆様の近況と軍政部当時の役割などからお聴かせ願います。

保坂　現在、山梨学院大学名誉教授、山梨大学の非常勤講師をしています。終戦当時は旧制中学の英語の教師をしていました。山梨軍政部の通訳を頼まれたのは、昭和二三年の三月でした。私の担当は新聞、ラジオの報道関係と教育でした。報道担当は二三年三月から八月ごろまでで、それから以後は教育担当だけになり、翌年の一〇月まで担当しました。仕事の内容は、通訳と雑談、ときに翻訳もしました。

保坂忠信氏

山梨軍政部とCICの関係

曾根　現在、私はアメリカ小麦連合会に勤務しています。米農務省と米大使館の外郭機関です。小麦をはじめアメリカ農産物の対日輸出問題など、いま騒がれている日米貿易摩擦の争点の中心にいます。（笑い）私はもともと山梨県人で、勝沼町小佐手の出身です。今から二五年前に東京に行き、アメリカ大使館の要請で日米農産物貿易関係の仕事につき、アメリカへ行ったり来たりの生活を過してまいりました。

保坂先生と同じく、私も旧制中学の英語教師でした。甲府中学から日川中学へ移ったのが昭和二〇年の秋でした。ちょうど甲府市長をしておられた野口二郎さん（故人、山梨日日新聞社・山梨放送会長）が私の仲人だった関係で終戦の年の一〇月、「秘書になってくれ」と頼まれました。米軍が甲府に乗り込んで来るので英語のできる人を市長の秘書にしたかったのです。野口市長とは義理ある間柄でしたので断りきれず、教師を辞めて甲府市役所秘書課に勤務することになりました。市役所に勤めていたのは三～四ヵ月だったと記憶しています。昭和二一年、第一次の戦争指導者公職追放令がGHQ（連合軍総司令部）から布告され、野口市長も追放の対象となり、市長の椅子から降ろされました。私も、その時、一緒に辞めました。昭和二二年二月一日のゼネスト中止命令がマッカーサー総司令長官から出されたころから政情が大きく変わりました。米ソの対立です。同時に極左、極右の両分子に対する諜報活動が活発化し、CIC（総司令部防諜部）の山梨分遣部隊は、米軍進駐と同時に初めは河口湖畔の富士ビューホテルの別棟に設置されましたが、米ソ関係の悪化で占領軍に対する破壊的行為の監視と調査という本来の業務が急速に忙しくなってまいりました。河口湖畔時代の人員はよく知りませんが、恐らく五、六人ぐらいではなかったでしょうか。

二世が三人、将校が二人か、三人いたと思います。ＣＩＣが山梨県警に引越してきてまもない二二年の暮れ、私は、県警の要請でＣＩＣとの連絡通訳のお手伝いをすることになったのです。防諜部顧問の肩書きでしたが、主として隊長および将校の通訳です。ＣＩＣで結局六年間働きました。仕事の内容は政治的なものが多く、今も極秘事項に属して語れない部分もあります。

若尾ビルに移ったころは、二世を含めて一二、三人のスタッフでした。

福島さん、ＣＩＣが県庁内に移されたとき、軍政部はありましたでしょうか。

福島　軍政部が設置されたあとだと思います。

曾根　警察は、米軍と密接に協力するようにと指令されていましたからＣＩＣと警察とは、表裏一体で行動していました。占領行政の縮小とは反対にＣＩＣの情報活動は拡大されてきました。ですからＣＩＣは対日平和条約の締結まで駐屯していたのです。軍政部はその前に引き上げ、中央に統轄されました。

坂本　甲府へ駐在してＣＩＣは、おもにどんな仕事をしましたか。

曾根　主たる仕事は、いわゆる「マッカーサーの眼となり、耳となれ」といわれたように、占領下における米軍の安全を守ることが主でした。したがって反米軍的活動・思想に対する情報収集・調査が中心だったと思います。その後、段々と思想的な調査が中心になってきました。ＣＩＣは結局、対日講和条約の締結まで若尾ビルにいたわけです。私もＣＩＣの任務を解かれ、その後、天野知事（故人）の下で知事室の外務関係の仕事をしていました。私の記憶では、終戦直後の九月末か、一〇月の初めごろドイツ戦線で活躍した第八軍の九七師団が極東に派遣され、玉幡飛行場（現竜王町西八幡）に進駐してきました。進駐の目的は、戦時中の軍需物資の摘発でした。

伊東　曾根さんには、つぎにまた詳しくお話を聴くとして、占領下のころ県の通訳をしておられた奈良さんに当時の思い出をお話しねがいます。

奈良　終戦まで曾根さんと同様、旧制日川中学（現日川高）の英語の教師をしていました。

曾根　奈良先生は、英語を教えていただいた恩人です。

奈良　終戦まもないころ「米軍が進駐してくるから通訳をして欲しい」と県の教育関係者から要請されて、戦後初めて県の通訳になりました。知事、県の主脳部と進駐軍との間に入って通訳しました。初めは玉幡飛行場に駐屯している米軍の将校が時折、県庁を尋ねて来て、知事などと話し合って帰るくらいで、大した用件もなかったようです。

奈良進氏

終戦の翌年の九月だったと思います。県庁内の県立図書館（現県庁東別館）を米軍が接収して山梨軍政部が開設されました。私は県の渉外課に籍をおき、県警の部長の部屋を借りて軍政部との事務連絡を担当することになりました。米軍の仕事は、おもに軍需品の隠匿物資の摘発やヤミ物資の摘発などが多かったようですが、私は直接タッチしなかったので詳しい内容は知りません。そのうちに軍政部が発足して、その隊長がネッスラーという人で大変厳格な方でし

た。いろいろ口やかましく注文をつけてきました。そのたびに仕事量がふえ、県庁の各課にも調査の翻訳依頼が多くなりました。逆に英文を日本語に訳して市町村に伝達する仕事もあり、県の渉外課は、英語を話せる人、翻訳する人をふやし、渉外課の中に翻訳係を設けて拡充を図りました。

仕事の内容は多種多様でしたが、山梨県の現状、たとえば行政、復興状況、農業生産、経済の動きなどをよくわかるように英訳して提出しろ―という命令に従って英文にまとめて軍政部に報告しました。また、山梨日日新聞のおもな記事を切り取り、政治、経済、社会などに仕分けて提出したこともありました。ここにおられる曾根さん、保坂さん、榎本さんら翻訳、通訳の先生方には大変お世話になりました。終戦時の知事は官選知事の谷川舞、つぎに吉江勝保知事です。知事の通訳をおもに担当していました。まだ終戦直後ですから県側にも米軍と県民の間にもめごとがあっては困るという心配があって、軍政部にはよく協力して問題が起こらないように配慮しました。

伊東　小林さん、軍政部による新聞の検閲がありましたか。

小林　検閲ということはありませんでしたが、アメリカのローカル紙の社長あがりの総司令部付報道担当者が、全国の新聞社を回って「占領政策を妨害するような記事は載せないでくれ」ときついことを言っていたようでしたが、軍政部の人たちは、新聞の報道については何も言わず、友好的でした。

軍政部への自己主張はタブー

伊東　終戦当時、山梨日日新聞の編集責任者の立場におられた小林さん。占領当時のご感想を……。

小林　私は戦前、戦後を通して山梨日日新聞の記者をしていました。軍政部との関係は米軍駐留と同時に始まりました。前に県立図書館があった県庁東別館に山梨軍政部があって定期的に呼び出されて軍政官からいろいろな情報を聴かれました。おもに県民生活、民情といったものを知りたかったようです。その席で通訳しておられたのが奈良さんたちでした。

伊東　榎本さんも通訳をなされていたわけですね。

榎本　私は終戦まで山梨英和で英語の教師をしていました。どうして軍政部に行ったのか、よく憶えていません。そこで何年いたのかもよく憶えていません。私は教育担当の通訳でした。私が最初に通訳を担当したのはブラバンティーさんという方でした。セラキュースという大学の教授でした。そのつぎにヴァンスターヴァンさんで、そのつぎにジャッジさんという方でした。ですが、軍政部の事情についてはほとんど知りませんでした。どうしてかというと、通訳というのは人の思想を受け売りするだけだから記憶に残っていないのが当然です。最初に軍政部に着任した方々は、大学の教授とか行政に明るい非常に真面目なインテリが多かったです。それでいて、何を話したか少しも憶えていないんです。（笑い）

アメリカの人は、勝者と敗者などというような発想は全くなくて非常にリベラルだという印象が強かったですね。人をバカにしたという態度はほとんどなかったと思います。県内の学校へ案内しても、決して威張らないし真剣でした。やはり日本人とは大部違うな、という記憶が今でも残っています。

伊東　福島さんは、終戦直後、県渉外課長をお勤めになられており

ましたね。当時のご感想を……。

福島　最近、体を弱くしてから記憶のほうも衰えて皆様のご期待に添えるお話しができないのが心苦しいですが、当時、県の方針としては、占領軍に対しては、いわゆる「サービスし過ぎず、自分の意見を言ってはいけない」ことにしていました。

福島　舜氏

伊東　ものの本によりますと、米軍は昭和二〇年九月に進駐してきて、最初の段階では、軍政部は山梨の場合、川崎市に本部を置いた一〇六軍政グループの東京軍政中隊に所属していたようですが、本当でしょうか。

曾根　米軍九七師団が最初に山梨に進駐してきたことはさっきも話しましたが、各県軍政部を統括した最高指揮官は第八軍のアイケルバーガー将軍ではなかったでしょうか。CICは軍政部とは全く関係がなく、マッカーサー司令部の参謀第二部の直属機関でした。ですから軍政部側とCICの間でしばしば意見が食い違い、仲が悪かったんです。第八軍司令部は、たしか横浜にありました。川崎に本部があったかどうか知りません。

伊東　昭和二一年六月に入って各県に軍政チームが組まれて山梨にも軍政部が置かれたと思います。奈良さんは先ほど、二一年九月ごろかなぁとおっしゃいましたが、発足したのはいつごろでしょうか。

奈良　二一年の九月ごろと記憶していますが、はっきり何月何日であったか憶えていないのです。

伊東　軍政部が引き揚げたのは昭和二四年ですね。

奈良　そうです。軍政部が関東民事部となって、県民会館の北隣にあった旧県医師会館を借りて数人のアメリカの職員が残留していました。

榎本　そのころでしょうか。吉田三郎さん（元甲府市助役）が県の渉外課長だったと思うんです。私は吉田さんの通訳として米軍に時々呼び出されました。ある日、米兵から「あすまでに昼食を百人分整えよ」と云われました。極度の食糧不足のころでしたので吉田室長は返答に困っていました。そこで私は、実情を話せばわかってもらえると腹を決めて、甲府の焼跡を眺めながら「この焼野原を見て下さい。食べるものもろくにない時ですので、とてもご要望を叶えることはできません。私たちは、もう一年もお風呂に入っていないんですよ」と、実情を細かく説明しますと「オフコース」と言っただけで何も言わないで了承していただきました。この一米兵は大学の学生だったと憶えています。初めて日本に来た方々は大学教授とか学生が多かったようです。実情をよく知らなかったようです。でも、ものわかりのいい方ばかりが多かったと思います。連合軍のなかでも甲府へ初期に来られた将校方にはリベラルなアメリカ人が多かったと思います。

曾根　公職追放令が出たころから米軍関係とのおつき合いが始まりました。野口市長から「軍政部の高官を招いてご馳走しなければいけないのではないか……」と相談を受けて交渉したことがあります。その時は逆に、医師会館に野口市長をはじめおもだった幹部が招かれてご馳走になりました。あの時、奈良先生もご一緒でしたね。野口市長が追放になる前でした。こちらでは軍関係の人を湯村

の昇仙閣にお招きするつもりで交渉に行きましたが、叱られこそしなかったのですが、逆に「こちらでよんでやる」ということになってご馳走になりました。

小林　野口さんの追放は、発行部数二万部を超える日刊新聞の社長がすべて戦争協力者として自動的に追放されたのです。野口さんは山梨日日新聞の社長だったので。

曾根　野口さんの場合は、大政翼賛会の役員だったですね。

小林　そうです。大政翼賛会と新聞社の社長という二つの理由で追放されたのです。

曾根　野口さんの追放解除の陳情書の翻訳を私がしました。

小林　そう言えば私も陳情書に署名しました。

坂本　解除になったのは昭和二六年の暮れでした。ちょうど私が山日に入社したばかりなので憶えています。

甲府進駐の一番乗りは米九七師団

坂本　一番先に着任した米軍の隊長が県議会議事堂に県の役職の方と市町村長を招集して着任のあいさつと軍政部の方針を話されたと聴いていますが、その時、女性が通訳なされたそうですが、榎本先生ではなかったですか……。

榎本　さあ、記憶にありませんね。

曾根　昭和二一年の三月頃だったと思います。野口さんが追放になられ、今井茂右衛門さんが後任の市長になられてまもないころだったと思います。

奈良　当時、市役所の秘書課長をしておられた飯田米太郎さん（昭和六一年死去）がその辺の事情に詳しいと思います。軍政部のステッツソン隊長の通訳として県会議事堂に同行したはずです。軍政部と甲府市との細かい内情を聴くのでしたら飯田さんが詳しいと思います。飯田さんも英語はよくできた方でした。

曾根　私が甲府市役所に入ったころの秘書課長は荻野三郎さんで、飯田さんは秘書係長でした。私は秘書課職員という立場でした。

有泉　昭和二〇年の秋に玉幡飛行場に第八軍の戦闘部隊が駐留し、一二月に引き揚げたわけですが、その後の軍政部の要員、規模はどのくらいだったのか、何人ぐらいのスタッフで仕事をしていたのでしょうか……。

奈良　スタッフは少ないですよ。ここに写真を持ってきましたが、隊長は中佐ぐらいで、その下の将校合わせて一〇人ぐらいではなかったでしょうか。

曾根　下士官はいませんでしたか。警備専門のような……。私の記憶ではサージャン（軍曹）がいたように思います。軍人以外に宿舎の食糧など必要物資の補給を行う要員がいて、裏方のスタッフを加えると倍以上の軍関係者がいたように思います。

坂本　米軍将校の住まいは舞鶴城跡ですか……。

奈良　はじめは医師会館でした。独身の将校の宿舎を兼ねていたようです。そこから県庁内の軍政部へかよって事務をしていました。

曾根　医師会館の隣に住まい（コンセット）を建てましたね。

奈良　お城の中にも三カ所ぐらい宿舎がありました。

坂本　甲府でも米軍に接収された場所が県庁以外にありましたね。

曾根　湯村の常磐ホテル、舞鶴公園、若尾ビル、それにCICの隊長が甲府市役所の水道局庁舎を宿舎にしていました。将校はいまの城跡の中の宿舎にいました。

奈良　隊長はステッソンさんでした。

小林　米軍の駐留軍がたくさんいたようですね。榎本先生が言われたようにスタッフのほとんどが学識者でした。対人関係も非常によかったですね。その半面、兵隊さんの中には相当低度の悪い人もかなりいましたよ。飲み屋で暴れているＧＩ（米兵）を見かけたこともあります。甲府駅などへ行くと、外国タバコを抱えて売りに来るＧＩもいました。声をかけるのを待ってる兵隊さんもいて、割合安く譲ってもらった思い出があります。米兵の宿舎はカマボコ兵舎と呼んでいましたね。

曾根　そうです。城の中にコンセットが三つほど並んでいたとすると、かなりの数の軍人が住んでいたことになります。

齋藤　岩波新書の「ＧＨＱ」（竹前栄治著）を読みますと、昭和二〇年一一月二六日現在、山梨県に駐留していた連合軍は一七一三人、それが一二月四日には一四一三人になっています。一〇日ほどで三百人減っています。山梨に進駐した米軍の大半は年を越すか越さないかで全員引き上げたのではないでしょうか。

曾根　そうですね。九七師団の引き揚げは早かったと思います。

小林　これは軍政部グループではなく、進駐軍ですね。

曾根　こう考えるべきだと思います。甲府周辺に進駐したのは九七師団です。それとは別に軍事基地としての北富士演習場には、さまざまな米軍部隊が入っています。ですから横田基地や厚木基地と近い上野原、大月といった中央線沿線には比較的早く進駐軍が入ってきたと思います。九七師団は山梨県から福島県に移動しています。小林さんがさっき話された甲府駅の駅長室も米軍が接収していました。Ｒ・Ｔ・Ｏという標識を掲げていて、そこには下士官がいました。鉄道輸送のレイルウェイ・トランスポーテイション・オフィスの略字です。

小林　タバコを売りに駅にいたＧＩは、そこの奥にいた人ではなく、玉幡あたりから来たようです。

曾根　当時は食糧難時代でしたが、若尾ビルの倉庫の中に山と食糧品が積んであって大勢の人にご馳走した記憶があります。この食糧品は、レーション（戦時食糧）といって飛行機から戦場に投下する大きな箱に入った食糧品です。

齋藤　それで情報を得ていたのでしょうか……。

曾根　すぐ情報と交換というのではなく、雰囲気づくりをしていたことは確かです。県内の財界人とか知事、県議などと毎月一回ぐらい若尾ビルで会合を開き、パーティーをしていました。と言ってこれらの人と接していたから反米的な動きがわかるといったものではありません。情報は部隊独自のルートと警察など別の所から得ていました。

坂本　追放されている人、されていない人の関係は……。

曾根　ＣＩＣに限らず、そうした差別はなかったと思います。

伊東　通訳の方々の給料はどうでしたか……。

曾根　私はここにおられる福島渉外課長から給料をいただいていたんですが、給料のほかにランゲージ・アローアンスといってボーナスに相当する手当が毎月五〇％つくんですよ。

荻原　優遇されていたわけですね。どういう身分でしたか……。米軍の雇用というわけですか……。

曾根　そうではありません。純然たる県職員ではありませんが、日本側が雇用し労務を提供するという身分です。いま沖縄県で米軍キ

ャンプに雇用されている条件と同じです。

小林　高級取りだったんですね。

曾根　当時はそうかもしれませんね。

伊東　通訳をしているとき、県民からいろいろ頼まれたと思いますが……。

奈良　そうですね。県民からいろいろな話を軍政部に持ち込んできましたね。そのつど、翻訳して報告しました。軍政部でこれをどう処理するということはないんですが、大きな問題は別として県民の苦情については口頭で軍政官に相談を持ちかけたこともいくどかあります。

曾根　明らかに相手を陥し入れようとする情報や中傷の手紙といったものもありましたが、真相を聴いたり、または判断して回答したり、隊長に助言したことがあります。

奈良　同じ日本人にして、あさましい感じがするものもありました。

教育と体育振興に貢献した米人

保坂　終戦直後のことです。県警の通訳を頼まれて特高課の人と一緒に大月へ行きました。アメリカル・ディビジョンという米軍が大月警察署を占拠しているというので出かけて行ったわけです。アメリカル・ディビジョンというのは南の島から来た優秀な部隊でした。技術的にも軍紀の点においてもですね。そこの指揮官はグレイハム中尉でした。大月署に着いたとき、上野原警察署の署長がなんかひどい目に遭ったという話しをききました。

それから甲府のほうへ進駐軍が来るようになりました。私が通訳として初めて米軍と接したのはその時でした。軍政部のころは教育担当でした。最初に接触した軍政官はジャッジさんという人でした。ジャッジさんは新聞報道の責任者でした。それが昭和二三年の三月から八月までした。旧図書館には一〇人ほどの翻訳家が仕事をしていました。ジャッジさんは新聞の政治、経済、教育、社会などの記事量を計っていました。また、日本の文献や物語を収集していてジャッジさんの部屋には、日本で集めた本がぎっしりありました。甲府市内でも古本屋に立ち寄っては必要な文献を集めていたようです。

あるいはジャッジさんは新聞記者の経験がある方だと思います。ジャッジさんのあと教育の面で八月からリチャード・ワースという方の通訳になりました。ワースさんは、小・中学校の統合とか新設の教育委員会の組織の問題に積極的な意見を述べられた方です。新しい教育委員会の法、特に教育委員会と教育長の権限の限界、同法四九条につき懇切な説明をし、活発な質疑応答が行なわれました。ワースさんは県教委の組織づくりに非常に貢献した方ですね。ワースさんは実に働き者で当時はジープで台風も構わず飛び回り、夜宿舎に帰ってから教育庁に回す書類をタイプするという風でした。ワースさんとは今でも文通していますが、「日本の教育は非常に進んでいるので教育のことに口をはさむ余地がないが、日本で欠けているのは図書館とＰＴＡである」と言って特に、図書館のサービスについては新しい考え方をふきこみました。ＰＴＡの組織づくりについて甲府市の穴切町にあった私立の実科女学校に甲府中学や菲崎中学などから生徒を集め彼らに会議を実現させ、それを父兄にみてもらうＰＴＡスクールを開き、それぞれがモデルになって会議の進め

方や運営についての講習をしたこともあります。

有泉　ワースさんは教育改革の面でかなり積極的に注文をつけたわけですね。

保坂　各学校を回るときでも、細かな条項が書いてあるチェック表を持っていてそれに書き込みました。文部省通達という形で教育委員会組織、六・三・三制が進められていました。ワースさん自身、実際には学校の運営には口出しせず、余り世話も焼きませんでした。教育関係で一番最後に赴任して来られたのがグレゴリーさんです。この方は体育の先生で京都から赴任して来られた方です。かなり強く指導されました。

有泉　具体的にどんなことをやらせたのですか……。

保坂　日本のスポーツの場合は、クラス単位が多かったですね。そして先生が「ピッピッ」と笛を吹いて歩調をとるといった体育指導でしたが、グレゴリーさんの指導は、数クラスをスポーツを通して（普通の体操ではなくて）同時に指導するというものでした。「能率的」な体育指導法でした。

ワースさんはグレゴリーさんとは対照的でした。彼はコロンビア大学で教育を専攻、最近ジョージ・タウン大学からドクターの学位をとりました。「テイク・イット・オア・リーブ・イット」つまり、「私の意見はあくまでもアドバイス。とりたいところを取って、とりたくないところはとるな」という考え方でしたので決して強制的に自分の意見を押しつけるようなことはしませんでした。

伊東　基本的なところは上からの命令があってアメリカ方式を断行したのでしょうが、かなり個人によってとらえ方が違っていたというところが興味深いですね。

保坂　そうですね。それぞれの地方の特色を生かした教育をめざしていたようです。山梨県には山梨県の方式でやる、という独自性を認められていたようです。大まかなところはフォックスさんという教育担当官がやって来て、教育関係者との対話の窓口になって、周期的にチェックしていました。

坂本　昭和二三年四月の新制高校発足まで戦時中の教科書を使っていたと思いますが……。

奈良　甲府一高を甲府中学といっていた時代です。教科書は全部、戦時中のものばかりでした。戦争に関連した部分は、墨で塗りつぶしてしまいました。ところが英語の教科書がないわけです。困っていた時に「この教科書を使いなさい」と軍政部のスターマンさんがサインした英語の教科書を代用にして英語を教えたこともあります。

有泉　軍政部当時、かなり膨大な量の報告書をＧＨＱなどの上層部に送っていたことが国会図書館の占領当時の資料を見てもわかります。軍政部は、どういう点に関心を持ち、山梨県のどんなところにポイントを置いて報告していたのでしょうか……。

榎本　ちょっといいですか。ジャッジさんの話がでましたが、個人的によく憶えていることがあります。ジャッジさんは「よく日本がアメリカなんかと戦争したなぁ」とおっしゃったんです。先生方もご覧になったと思いますが、日本の全国の地図が何十枚も入っている分厚い本が各都道府県のために一冊以上ずつあって、その中に日本人の名前が書き込まれています。この人はアメリカに好意を持っている人、この人はアメリカに好意を持っていない人と仕分けしてありました。甲府の関係だけでも何冊もありましたね。不思議に思

いまして「これはどういう所でお調べになったのですか」と尋ねますとアメリカなどに抑留されている日本人、日系人から聴いたと言っておられました。ジャッジさんと対話して、知らなかったいろいろな世界観を教わりました。私自身も、物資があり余っている国と食べる物もない日本がよく戦ったなぁと思いましたね。日本軍が戦争中に比島のバターン半島で行った〝死の行進〟という捕虜ぎゃく待の事件がありましたね。「日本人はあんなことをよくしたもんですね」と言ったら「あなた戦争というものはそんなものだよ。当り前じゃあないですか」と言うんです。そしてドイツ人と日本の国情と性格の違い、アメリカ人と日本人の違いなど深い学識を持たれての分析の上で仕事をしておられました。アウシュビッツの事、その他ドイツが占領したポーランドなどでどの様にその国民を徹底的に悩ませたかというような話もしてもらいました。

榎本愛子氏

伊東　軍政部のレポートを読んで感動したのですが、深刻な県内の食糧事情を少しでもよくしようと軍政部の人たちが必死になって食糧の確保に努力していますね。

曾根　伝染病予防対策や地方病の根元となっている宮入貝の撲滅など環境保全と県民の健康に貢献したことも忘れてはならないと思います。

山梨は東日本軍政部のベスト5

伊東　山梨軍政部から本部へ膨大な資料が送られていますが、それを翻訳して軍政部の高官がいちいち目を通されたと思いますが、福島さんこの辺はどうでしょうか。

福島　わかりませんね。私たちよりずっと上の県の人たちとの交渉でレポートが出されていたんじゃないかな。

伊東　奈良先生はご存知ないですか……。

奈良　軍政部の係の将校がみんなで相談して隊長がサインを出すようになっていたと思います。私の聴いたところでは、東の方では山梨軍政部は最も成績がよかった行政機関だ、とステッソン隊長が話してくれました。そして「君たちはそこに参加しているのだから誇りに思っていいんだよ」と言っていました。東日本軍政部の中ではベスト5の中に入るということを話していました。レポートは軍政部の将校が書き、隊長が読んでサインして出されたのではないでしょうか。県庁の書類を県人が翻訳して出したものではありませんね。

伊東　軍政部の隊長の一番先がネッスラーさんで、その次はステッソン中佐ですね。その次は……。

奈良　それで終りです。ステッソン中佐は割合長く勤めていました。

荻原　前の「甲府市史」の中に昭和二〇年一二月、米軍の初代軍政官ブルーワ中佐とありますが……。

奈良　ブルーワという方がネッスラーさんです。軍政部ができたあとに来た人です。ブルーワさんは、軍政官ではなく、玉幡にいた九七師団の将校です。

荻原　この人の名前が年表に載っていますが、調べ直す必要がありますね。

抵抗が強かった農地解放と米の供出

曾根　占領当時をふり返ってみて、一番抵抗感が強かったのは農地解放と米の供出です。ＣＩＣの仕事ではありませんが、その間の情況はよくつかんでいました。農地解放は地主側の厳しい抵抗です。米の供出については農林省がいじめられました。農林省から都道府県知事あてに米の供出割当量が押しつけられ、それを各市町村に割りふるわけですが、深刻な食糧難時代でしたから各市町村長は割当量をめぐって殴り合いをしたほどでした。

奈良　軍政部の依頼で各郡の県の出先の地方事務所を回って何パーセント供出できるかを聴き歩いたこともありました。

曾根　それに左翼系運動が絡み、軍政部もＣＩＣも神経を尖らせていました。

伊東　そういう場合には軍政部が自ら指導したのでしょうか。

坂本　強権発動というのがありましたね。あれは軍政部がタッチしていたのでしょうか……。

曾根　全部そうでしょうね。

島袋　具体的にはどんな形でやりましたか……。

曾根　本格的に抵抗すれば、警察に連行されましたよ。私も抵抗した二、三の地主を知っています。米軍は地主に対する誤解もあったようです。加賀百万石のような封建時代の大名と山梨県の小村の地主を同じように混同していたのです。今もアメリカの日本占領政策への反省になっています。江戸時代からの大地主と、自分一代で築いた小地主の農地を混同して、一律に農地解放の綱をかぶせてしまった点です。しかし、当時は、そんなことを言って抵抗すれば警察に三、四日ぶち込まれました。軍国主義につながる封建制度、人権差別を撤廃するという民主主義という至上命令があまりに勇み足だったので、いまになって反省する部分が大きいのではないでしょうか……。山梨県内には「米よこせ運動」の暴動は起りませんでしたが、占領軍は鎮圧部隊を動員するのを避けて、本国から食糧を送り込んで援助するといった政策を打ち出したのです。日本側でも戦時型の特高警察の廃止に伴い、警備課が新設され、公安調査庁が生まれ、反米、反動分子の取り締りが強化されてきました。

吉江知事と天野久氏が出馬して知事選が行われたとき、軍政部は吉江知事を推し、ＣＩＣは天野さんを推すといったおかしな状況があったことをみても、軍政部とＣＩＣは政治的にも仲が悪かったと言えます。

奈良　米軍は地方の選挙に関心が強かったですね。軍政部の将校が開票場へ顔を出して開票結果を真剣にメモしていたことを思い出します。

榎本　先生方からお話しを聴いて、毎日新聞社から出版された「オリンポスの柱の蔭に」（中園英助著）を読んだのと一致します。マッカーサーの占領政策の派閥争いに追いつめられてカイロのホテルで自殺したＥ・Ｈ・ノーマンさんの苦悩がよくわかります。

高木　選挙に関するＣＩＣの関心はいかがでしたか……。

曾根　ＣＩＣは選挙そのものには関心がありませんでしたが、選挙にあらわれた県民の政治意識の傾向には非常に関心を寄せていました。自由党の得票数に民主党の得票数、共産党の得票数はどのくらいか、社会党はどのくらい伸びたか。逆に反米右翼の票もマークしていました。

佐藤　米軍が直接、甲府市内などに住んでいる人たちと接触するという機会はなかったのでしょうか。

曾根　ＣＩＣの場合は、ずい分ありましたよ。まず警察関係者ですね。政治家、労組の関係者、新聞記者、県職員など県内の各層の方々と直接交際して的確な情報を把握することに努力していました。

高木　本市の町内会は昭和二二年四月、ＧＨＱの命令で廃止にされましたが、ＣＩＣは町内会の組織に対してどうだったのでしょうか。軍政部のレポートをみますと、かなり克明に調査して戦時中の縦の系列の崩壊をはかっているようです。大政翼賛会の末端の組織として危険視していたんですね。

曾根　ＣＩＣは町内会組織に、あまり関心はなかったと記憶しています。現実には自治会という形で復活させていますね。

高木　そうですね。三、四年後にはほとんどの地域で名称を変えて再生しています。

小林　町内会の起源は、江戸時代の五人組制度が基礎になっていますね。一人が罪を犯すと五人が罪をかぶるという連帯組織です。日本人は組織をつくることは器用で、今も自治会は甲府市などでも欠かせない行政の下部組織になっていますが、その辺は軍政部も心得ていて、名称を変えただけで終ったようですね。

小林　静氏

坂本　行政の側でも存続を要望したはずですが、それは米軍側の一方的な見解で廃止したのでしょうね。

伊東　ＣＩＣの組織上の人員配置はどうだったでしょうか……。

曾根　一番多かったときで一〇人ぐらいでした。そのときは少佐か中佐クラスが隊長で、その他はオペレーション・オフィサーです。その外に二世軍人が、二、三人、あとアメリカ人でした。

齋藤　県庁の公文書の在庫を調べたかぎりでは軍政部関係の書類は労務調達関係のものがちょっと残っているだけなんです。当時、県では複写した書類を残さなかったのですか……。

福島　当時、秘密事項でないかぎり、写しはあったと思います。最初に手掛けた職員は持っていたと思いますが、公文書と言っても軍政部関係の書類は状況説明がおもなので必要と認めず、あとで廃棄したものかも知れません。

県の重要書類として残すべきものは残しているはずですが……。

曾根　県の保存文書に軍政部関係の書類がないということですね。

齋藤　県に保存していなくても、たとえば山梨県の教育問題で大きすぎた問題については文部省に聴け、と言います。文部省にあるとしたら、その書類が戻ってくる可能性があるということになるのかならないのか……。

高木　昭和二四年三月の県の事務分掌でみると渉外課でしている仕事を二つ挙げています。一つは進駐軍に関すること。もう一つは特殊物件の保管および処理に関する事項です。進駐軍に対するサービスなどでは各市町村へ協力要請とかをしていると思うのですが、それに関する文書は市にも何も残っていないのです。

福島　具体的には事務的な協力だけでこれといったサービスはしていませんでした。文書保存についても上層部で保存命令を出した文書は別として私たちは積極的に進駐軍関係の文書を保存しなかったと思います。一般文書と同じようにある期間保存しておいて持って

たのではないでしょうか……。

齋藤　関連していますが、県の二五年の総務部渉外課の文書の中に損害補償事務吉田出張所というのが出てきますが、それは現在で言うと……。

福島　主として北富士演習場の関係ではないでしょうか。

榎本　軍政部当時、教育に関係していたバンスターバンさんと保坂先生は、今も文通しておられるようです。彼は記録を非常に大事にしておられました。いつも私にも「書類は残しておけ」といわれたことを憶えています。保坂先生からバンスターバンさんに手紙で聴くこともできます。

保坂　アメリカ政府直属の占領史の専門家です。近く山梨進駐当時の教育に関する詳しい研究を発表する準備をしております。

伊東　県渉外課の特殊物件とは何でしょう。

福島　隠匿物資、軍需物資の摘発などのことを取扱っていました。軍政部の調査内容の中にはさっきお話したように行政監視だけではなく、県民の生活状況、追放者の動向など多岐にわたるものでした。

伊東　戦時中の武器の回収があったと思いますが、県庁の書類にはないでしょうね。

小林　刀剣を含めて武器を持っている人は申告する義務がありましたね。

曾根　旧日本軍の軍需物資については、米軍の指令に基づき、県に管理責任がありました。武器の場合は米軍が回収し、その他のものについては県に処分を依頼しました。私の記憶では随分、軍の隠匿物資があって、その摘発に軍政部は大きな仕事をしていました。

奈良　九七師団で摘発した山の中のホラ穴に隠されていたガソリンも大変な量でした。

曾根　奈良先生、牛皮がすごくありましたね。

奈良　ええ、それをチェックして歩いたのを憶えています。

伊東　軍政部の日報の中に武器の押収記録があります。

曾根　旧六三部隊とか玉幡飛行場など隠匿物資のありそうな所を情報に基づいて片っ端から捜索しましたね。それでも摘発する前にごっそり盗まれて空っぽだったという場面も随分ありました。

奈良　旧陸軍の軍用トラックを数十台押収して甲府城内に並べて市町村に払い下げたこともありました。

先走った県の慰安施設

伊東　進駐軍に対しての慰安施設はどうだったんでしょう……。

小林　進駐軍専用の慰安施設を玉幡飛行場の近くにバラック建てで造ったという話を聴きました。

曾根　アメリカ軍が来るというのは、野獣のように思われ婦女子を見ると暴行、その極に達するだろうというので娘を山へ隠すなど大騒ぎの状況でした。そこで婦女子の防波提になる慰安施設を早急に造る必要がある、として―多分、警察の中央指令でしょうな、いまの竜王町の榎と甲府の穴切の遊郭に進駐軍専用の施設をつくり、特殊慰安施設協会というのを創立しました。初代の会長は当時日産自動車の平原正嘉さんでした。それに、警察の保安関係の人が監督して進駐軍の生理的な処理をさせようとしたのです。それを米軍は、非常に快く思っていなかったですね。先走って慰安

施設をつくったはいいが、厳重な衛生検査をやったりして結局は榎に建てた二階建てのバラックの施設をすぐ取り壊してしまいました。

榎本　終戦の日、富士川小学校から長禅寺に行く途中に「接待婦を求む」と書いた募集広告が貼ってあって、真っ白い服に大きな帽子をかぶってハイヒールを履いた若い女性がお寺のほうから来て、広告の前に立っていたんです。不思議に思いましたが、終戦と同時に慰安婦の募集を始めたんですね。

曾根　芸者と慰安婦をごっちゃにして集めたのもおかしな話です。相当あわてていたんですね。今度は貧しさのためにパンパンガールという街娼がわぁーとふえてきたんです。その中にはプロもいれば生活のために体を売る未亡人や娘がいたわけです。

小林　県全体から言えば北富士演習場周辺がすごかったですね。

伊東　そのころ進駐軍の暴行事件とか窃盗、強盗といった事件は多かったでしょうね。

小林　さっきも言ったように飲み屋で暴れるなど、実際にあったと思いますが、それでも表面に出た事件はなかったと思います。

曾根　GIに警察官が脅かされた事件がありましたが、割合い少なかったですね。

小林　戦後の一時期は警察力が低下し、軍政部ないしは進駐軍のMPなどの治安維持に頼っていた時代でした。

坂本　戦後、非合法な左翼の大衆運動が盛んでした。昭和二四年の境川事件、二七年の増穂町警襲撃事件など左翼弾圧に伴う大事件が県内各地で起きました。

伊東　昭和二〇年九月一八日、プレスコードができて新聞の発行停止が起きましたが、県内にはなかったでしょうか。

小林　いや、なかったですね。自由民権運動が高まった明治の初期には、山日も二回ぐらい発行停止処分を受けましたが……。

伊東　では最後に曾根先生、ひと言……。

曾根　考えてみると米占領軍の中に二つの大きな流れがあったわけです。先ほど榎本先生がおっしゃったリベラルなグループ、つまり日本実験派ですよ。アメリカン・デモクラシーの実践を、アメリカ国内でできない政策を日本の占領地でやってみようという極めて真摯な気持ちで実施しようとしたグループです。その人たちが総司令部の要職につき、日本の民主化という政策を打ち出したラジカルな面があるわけですよ。農地解放もその一つだし、一連の集中力排除政策、教育制度の改革もその通りなんです。つまりはGHQによる軍国主義、封建制度の撤廃といったこととは別にもう一つのグループの動きが、米ソ対立の激化を背景にあらわれてきたのです。これは、むしろ反共、保守的な動きをとったのです。したがって、占領政策は日本とアメリカがいろいろの政策面でぶつかり合って民主化へ脱皮していったと思います。

曾根康夫氏

占領政策は、ある意味では非常に矛盾に満ちた要素を持っており、いま四〇年を振り返ってみて、よかった面と悪かった面があったと思います。しかし、日本人にとって米軍に占領されたお陰で、今までできなかった農地解放、男女平等と婦人参政権、教育制度、地方自治の樹立など数えきれないほどの恩恵を浴したと思います。いま

その反省の上に立たされ、行革や教育改革などが進められています。日本の立場から見直すべきものは率直に見直す時期だと思います。

伊東　長時間に貴重なお話しを聴くことができまして心からお礼申し上げます。

まとめ

昭和二〇年九月から同二六年九月の対日講和条約締結までの七年間、甲府周辺にアイケルバーガー将軍麾下の第八軍第九七師団一七一三人が進駐したのを最初として、GHQ直属の山梨軍政部が発足。米ソ対立を契機に極左・極右の反動分子に対する諜報活動を目的とする防諜部（CIC）の拡充などめまぐるしい占領政策の歴史の一ページを飾って終止符を打った。

冒頭に述べた通り、敗戦と同時に行政、経済対策などあらゆる分野の主導権をにぎっていた米軍の占領政策は、資料がないままに地方史研究の中でも〝空白の時代〟を過してきた。軍政部当時の膨大な資料の大半は、米政府から公開文書として日本政府に移管されて以来、ヴェールにつつまれていた占領下の行政、経済などの実態が明らかになった。マイクロフィルムに収録され、国会図書館に収納されている軍政部資料の中から山梨軍政部関係の資料を取り寄せて、特に必要と認める甲府市関係のレポートを抽出して翻訳、「甲府市史・近現代編」に掲載することにした。

これに関連して軍政部、CICなどと深く関わっておられた方々を招いての座談会は、全国でも類例のないユニークな内容であった。タブーとされた米軍の占領政策の核心に触れる当時、通訳、翻訳などを担当していた方々の発言は、すべて耳新しく、新鮮な響きを感じた。

軍国の全体主義から一転して〝個〟の自由を謳歌するアメリカンデモクラシーが占領政策の第一のプログラムに組み込まれて電撃的な早さで施行され、それがまた見事に地方のすみずみまで洩れなく行き届いていったのである。

GHQのタテの線と同時に曾根発言の独創的な個人の実験派の志向による行政、教育、経済の改革が入り乱れて、地方独自の政策が進められていった事実など聴き洩らせない歴史のひとこまを知ることができた。

また、山梨軍政部やCICに配属された将校たちは、貧困と失意にあえぐ県民と接して、少しでも暮らしがよくなるように、熱情と誠意を持って尽くす姿が彷彿としてきて感動した。記憶をたどっての座談会という性格上、軍政部、CICなどの幹部の正式な姓名、年月日など正確さを欠ける部分があって残念だが、今回の座談会を骨子にして占領下の甲府の行政、経済、教育などあらゆる分野の解明に役立てる生きた資料にしなければならない。

（記録・編集担当　坂本徳一）